

【 復活のトロパリ 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
 恵 深 主 爾 高

くだり、みっかのほうむりをうけて、
 降 三 日 葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、
 我 等 苦 釋 給

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
 我 生 命 復 活 主 光

えいはなんぢにきす。
 榮 爾 歸

【 階梯者イオアンの讃詞 第1調 】

ほうしんなるわがしんぷイオアンよ、な
 捧 神 我 神 父 爾

んぢはののじゅうしゃにしてにくたいにおけるて
 野 住 者 肉 體 於 天

んし およびきせきしゃとあらわれたり。な
 使 及 奇 跡 者 顯 爾

んぢはものいみと、けいせいと、きとうと
 齋 警 醒 祈 禱

ををもっててんのおんしをえて、しんをもって
 以 天 恩 賜 獲 信 以

な んぢに は し り つ く も の の れ い た い の や
 爾 趨 附 者 の 靈 體 の 病
 ま い を い や し た も お う 。 こ う え い は な 爾
 醫 給 光 榮 は 爾
 んぢに ち か ら を あ た え し し ゅ に き し 、 こ う え
 力 與 主 歸 光 榮
 い は な んぢに え い か ん を こ う む ら せ し し ゅ に き
 爾 榮 冠 冠 主 歸
 し 、 こ う え い は な んぢを も っ て し ゅ う に
 光 榮 爾 以 衆
 い や し を た も う し ゅ に き す 。
 醫 治 賜 主 歸

【 階梯者イオアンのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸
 す 、
 き ょ う ど う し イ オ ア ン 、 わ れ ら の し ん ぶ よ 、 し ゅ
 嚮 導 師 我 等 神 父 主
 は な んぢ を ま こ と の せ っ せ い の た か き に 、 う
 爾 眞 節 制 高 動

ごかざるほし、そのひかりをもってしきよくをみ
 星 其 光 以 四 極 導
 ちびくものとしておきたまえり。
 者 置 給

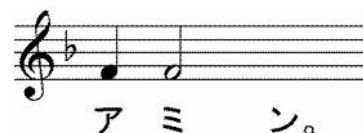
【 復活のコンダク 第8調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世
 だいじんじなるしゅよ、なんぢははかよりふく
 大 仁 慈 主 爾 墓 復
 かつして、しせしものをおこし、ア
 活 死 者 興
 ダムをふくかつせしめたまえり。エヴァはなん
 復 活 給 えり 爾
 ぢのふくかつをたのしみ、せかいのはて
 復 活 樂 世 界 極
 はなんぢがしよりおきたるをいわう。
 爾 死 興 祝

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な

さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
 司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せいのものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょう せいのものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じょう せいのものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 歸 今 何 時 世 世
 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 殺 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第8調 及び克肖者の第7調 】

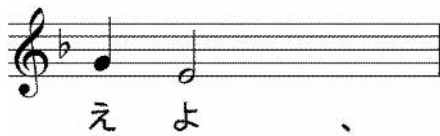
司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

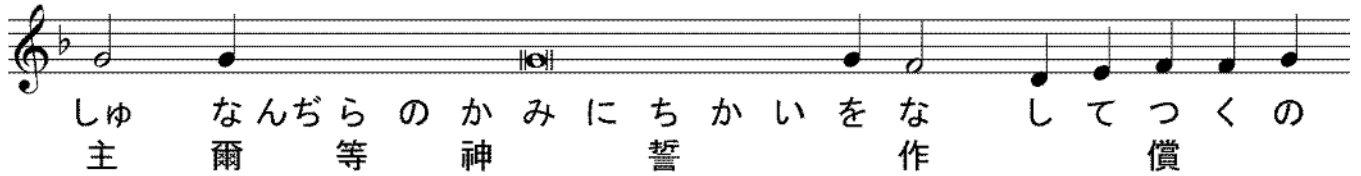
誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

し ゅ な ん ぢ ら の か み に ち か い を な し て つ く の
 主 爾 等 神 誓 作 償



え よ 、

誦經) 神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに大なり、

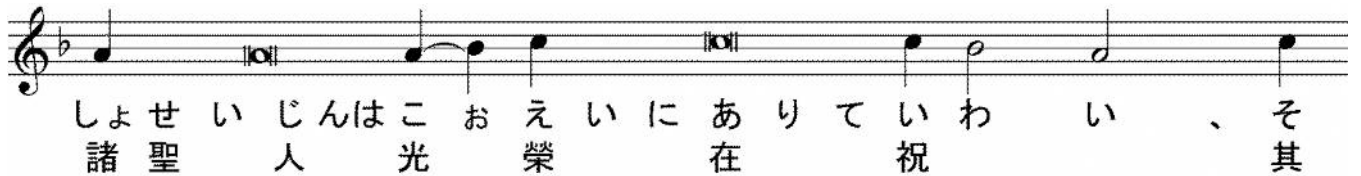


しゅ なんぢらのかみにちかいをなしてつくの
主 爾等 神 誓 作 償



え よ 、

誦經) 諸聖人は光榮に在りて祝い、其榻に在りて歡ぶべし、



しよせいじんはこおえい にありていわい、そ
諸聖人 光 榮 在 祝 い、其



の ところ にありてよろこぶべし。
榻 在 歡

【 使徒經 (アポストロス) 314 端 エウレイ書6章13節~20節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、神はアヴラアムに許約を賜う時、己より大なる者の一も指して誓うべき

なきが故に、己を指して誓いて云えり、我必祝福して爾を祝福し、益して爾

を益さんと。斯くアヴラアムは恒忍して、許約せられし所を獲たり。蓋人は己より大

なる者を指して誓う、且事を確證する誓は彼等の凡の争論を息む、故に神も許

約を嗣ぐ者に、己の旨の易らざるを更に明に示さんと欲して、別に誓を立てたり、

斯の二の易らざる者に於て神は語る能わざるが故に、我等斯の二の者を以て確

なる^{なぐさめ} 慰^えを得ん爲なり、蓋^{ため} 我等は趨^{けだしわれら}りて我が前^{はし}に在る望^わを執^{まえ}る者なり。此^あの望^{のぞみ}は我^{もの}ら^この望^{のぞみ}は我^{われ}等の^ら靈^{たましい}の爲^{ため}に堅^{かた}くして、動^{うご}かざる^{いかり} 錨^{ごと}の如^{かつまく}し、且^{うち} 幔^いの内^{すなわち}に入る、即^{すなわち} イイススがメル^{すなわち}キセデクの班^{はん}に^{したが} 循^{よよ}いて、世^{しさいちよう}世^なの司^{われら}祭^{ため}長^{ぜんく}と爲^いりて、我^{ところ}等の爲^いに前^{ところ}驅^いとして入^{ところ}りし所^{ところ}なり。

(比較用 口語訳) 神がアブラハムに対して約束されたとき、さして誓うのに、ご自分よりも上のものがないので、ご自分をさして誓って、「わたしは、必ずあなたを祝福し、必ずあなたの子孫をふやす」と言われた。このようにして、アブラハムは忍耐強く待ったので、約束のものを得たのである。いったい、人間は自分より上のものをさして誓うのであり、そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証となるのである。そこで、神は、約束のものを受け継ぐ人々に、ご計画の不変であることを、いつそうはっきり示そうと思われ、誓いによって保証されたのである。それは、偽ることのあり得ない神に立てられた二つの不変の事からによって、前におかれている望みを捕えようとして世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを受けるためである。この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ「幕の内」にはいり行かせるものである。その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。

【 使徒経 (アポストロス) 229 端 エフェス書 5 章 9 節～19 節 】

誦^{けいてい}經^{ひかり} 兄^こ弟^{ごと}よ、光^{おこな}の子^{けだししん}の如^みく行^{およそ}え。蓋^{じあい} 神^{こうぎ}の實^{しんじつ}は 凡^あの慈^{なんぢ}愛^あと公^あ義^{なんぢ}と眞^あ實^{なんぢ}とに在^あり。爾^{なんぢ}等^{なんぢ}神^{なんぢ}の悦^{なんぢ}ぶ所^{なんぢ}の何^{なんぢ}なるを 審^{なんぢ}にせよ、實^{なんぢ}を結^{なんぢ}ばざる暗^{なんぢ}昧^{なんぢ}の行^{なんぢ}に與^{なんぢ}る勿^{なんぢ}れ、
爾^{なんぢ}等^{なんぢ}之^{なんぢ}を責^{なんぢ}めよ。蓋^{なんぢ} 彼^{なんぢ}等^{なんぢ}が隠^{なんぢ}に行^{なんぢ}う事^{なんぢ}は、言^{なんぢ}うも亦^{なんぢ}耻^{なんぢ}づ可^{なんぢ}し。凡^{なんぢ}そ責^{なんぢ}めらる^{なんぢ}る事^{なんぢ}は
光^{なんぢ}に由^{なんぢ}りて顯^{なんぢ}る、蓋^{なんぢ} 凡^{なんぢ}そ顯^{なんぢ}る事^{なんぢ}は光^{なんぢ}なり。故^{なんぢ}に云^{なんぢ}えるあり、寐^{なんぢ}ぬる者^{なんぢ}起^{なんぢ}きよ、死^{なんぢ}
より復^{なんぢ}活^{なんぢ}せよ、ハリス^{なんぢ}トス 爾^{なんぢ}を照^{なんぢ}さん。是^{なんぢ}を以^{なんぢ}て視^{なんぢ}よ、行^{なんぢ}を慎^{なんぢ}みて無^{なんぢ}智^{なんぢ}の者^{なんぢ}の如^{なんぢ}く
せず、乃^{なんぢ} 智^{なんぢ}ある者^{なんぢ}の如^{なんぢ}くせよ、時^{なんぢ}を惜^{なんぢ}むべし、日^{なんぢ}は悪^{なんぢ}しけらばなり。是^{なんぢ}の故^{なんぢ}に思^{なんぢ}慮^{なんぢ}なき者^{なんぢ}
と爲^{なんぢ}る勿^{なんぢ}れ、乃^{なんぢ} 神^{なんぢ}の旨^{なんぢ}の何^{なんぢ}なるを覺^{なんぢ}れ。又^{なんぢ} 酒^{なんぢ}に酔^{なんぢ}う勿^{なんぢ}れ、此^{なんぢ}れに由^{なんぢ}りて放^{なんぢ}蕩^{なんぢ}あり、
乃^{なんぢ} 神^{なんぢ}に満^{なんぢ}てられよ。聖^{なんぢ} 詠^{なんぢ}と歌^{なんぢ} 頌^{なんぢ}と屬^{なんぢ} 神^{なんぢ}の詩^{なんぢ} 賦^{なんぢ}とを以^{なんぢ}て、口^{なんぢ}に唱^{なんぢ}え、心^{なんぢ}に和^{なんぢ}して、
主^{なんぢ}を讚^{なんぢ}美^{なんぢ}せよ。

(比較用 口語訳) 光の子らしく歩きなさい—— 光はあらゆる善意と正義と真実との実を結ばせるものである—— 主に喜ばれるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい。 実を結ばないやみのわざに加

わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。彼らが隠れて行っていることは、口にするだけでも恥ずかしい事である。しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかになる。明らかにされたものは皆、光となるのである。だから、こう書いてある、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」。そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者のようにはなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。だから、愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御霊に満たされて、詩とさんびと霊の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。

【 アリルイヤ 主日第8調 及び 克肖者の第7調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

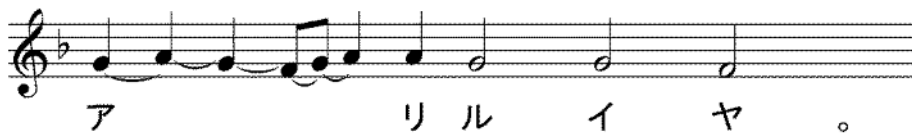
誦經) ^{きた しゅ うた かみわ すくい かため よ} 来りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{かれら しゅ みや う わ かみ にわ さか} 彼等は主の宮に植えられて、我が神の庭に榮ゆ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、



ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん}人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ}の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ}畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

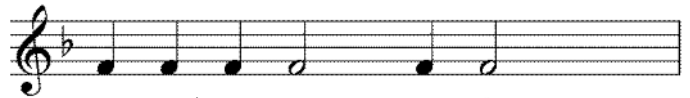
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ}を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん}爾は我が 靈と體との光 照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ}て生命を施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書 40 端 9 章 17~31 節 】

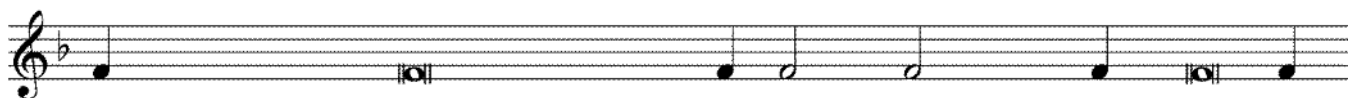
司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん}睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



なんぢの し んにも 。

爾 神

司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ}マルコ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、 こう え い は なんぢに き し、 こう え い
主 光 榮 爾 歸 光 榮



は なんぢに き す 。

爾 歸

司祭) ^{つつし き}謹みて聴くべし、

司祭) ^{つつし き か ときあるひと つ ふくはい い し われおし き よ}謹みて聴くべし、彼の時或人イイススに就きて、伏拜して曰えり、師よ、我瘡の鬼に憑

^{わ こ なんぢ たづさ きた き いづこ かれ とら な たお かれあわ ふ}られたる我が子を 爾に 携え來れり。鬼は何處に彼を執うとも、投げ付し、彼沫を噴き、

^{は か からだか われなんぢ もんと これ お い こ かれらあた}齒を切み、體 枯る、我 爾の門徒に之を逐い出ださんことを請いたれども、彼等能わざり

^{かれ こた いわ ああしん よ われいつ なんぢら とも あ いつ}き。イイスス彼に答えて曰く、噫 信なき世や、我何時までか 爾等と偕に在らん、何時まで

なんぢら しの かれ わ もと たづさ きた すなわちかれ たづさ きた かれ み
 か 爾 等を忍ばん、彼を我が許に 攜 え 來れ。 乃 彼を 攜 え 來れり、彼 イイススを見れ
 ば、鬼 忽 彼を拘 攣させ、彼地に 仆れ 輾 びて 沫を 噴けり。イイスス 其 父に 問えり、彼に
 か な いづれ とき い おきな とき き かれ ほろぼ ため しばしばひ
 斯く 爲りしは 何 の時よりか。 曰えり、 幼 き時よりなり。鬼は彼を 滅 さん爲に、 屢 火
 またみづ とう なんぢも なに よく われら あわれ われら たす これ
 に 又 水に 投じたり。 爾 若し 何をか 能せば、我等を 憫 みて、我等を 助けよ。イイスス之
 い なんぢも いくばく しん よく しん もの よく どうじ ちち
 に 謂えり、 爾 若し 幾 何か 信ずることを 能せば、 信ずる者には 能せざる ことなし。 童子の 父
 ただち なみだ た よ い しゅ われしん わ ふしん たす たみ は
 直 に 涙を 垂れて、 呼びて 曰えり、 主よ、 我 信ず、我が 不信を 助けよ。イイスス 民の 趨せ
 あつま み おき いまし これ い おし みみしい き われなんぢ めい かれ
 集 るを見て、 汚鬼を 禁 めて、之に 謂えり、 瘡にして 聾 なる鬼よ、我 爾に 命ず、彼よ
 い ふたたびかれ い なか きさけ はなはだ かれ ひきつけ い かれ し
 り出でて、 再 彼に入る 勿れ。鬼 號 びて、 甚 しく彼を 拘 攣させて 出でたり、 彼は 死せ
 もの ごと おお ものかれし い いた そくて と かれ おこ
 し者の 若くなりて、 多くの 者 彼 死せりと 云うに 至れり。イイスス 其 手を 執りて、 彼を 起し
 かねすなわちた いえ い とき そのもん と ひそか かれ と われら これ お
 たらば、 彼 即 立てり。イイスス 家に入りし 時、 其 門徒 私 に 彼に 問えり、我等が 之を 逐
 い あた なん ゆえ かれい きとう ものいみ よ こ たぐい い
 い 出だす 能わざりしは 何の 故ぞ。 彼 曰えり、 祈 禱と 齋 とに 由らざれば、 此の 類 は 出づる
 え かれらかしこ い す かれ ひと これ し ほつ
 を 得ざる なり。 彼 等 彼處を 出でて、 ガリレヤを 過ぐ、 彼は 人の 之を 知らん ことを 欲せざりき。
 けだしそのもと おし ひと こ ひとびと て わた ひとびとかれ ころ ころ のちかれだい
 蓋 其 門徒に 教へて、 人の 子には 人 人の 手に 付され、 人 人 彼を 殺し、 殺されて 後 彼 第
 さんじつ ふくかつ い
 三 日に 復 活せんと 曰えり。

(比較用 口語訳) 群衆のひとりが答えた、「先生、おしの霊につかれていますわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。霊がこのむすこにとりつきますと、どこでも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、齒をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」。イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢ができようか。その子をわたしの所に連れてきなさい」。そこで人々は、その子をみもとに連れてきた。霊がイエスを見るや否や、その子をひきつけさせたので、子は地に倒れ、あわを吹きながらころげまわった。そこで、イエスが父親に「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からです。霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。イエスは彼に言われた、「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」。その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊をしかって言われた、「おしとつんぼの霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいつて来るな」。すると霊は叫び声をあげ、激しく引きつけさせて出て行った。そ

の子は死人のようになったので、多くの人は、死んだのだと言った。しかし、イエスが手を取って起されると、その子は立ち上がった。家にはいられたとき、弟子たちはひそかにお尋ねした、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」。すると、イエスは言われた、「このたぐいは、祈らなければ、どうしても追い出すことはできない」。それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 10 章 4 章 25～5 章 12 節 】

司祭^か彼の^{とき}時、ガリラヤ、デカポリ、イエルサリム、イウデヤ、イオ^{そと}ルダ^{おお}ンの^{たみ}外^かより^{したが}衆^たくの^た民^た彼^たに^た従^たえ^たり。イイス^{ぐん}群^{しゅう}衆^みを見て、山^{やま}に登^{のぼ}り、既^すに^で坐^ざせしに、其^{その}門^{もん}徒^と彼^かれ^つに^か就^くけり。彼^かれ^くち^{ひら}口^{くち}を^{ひら}啓^ききて、
これ^{おし}之^いを^{しん}教^{まづ}えて^{もの}曰^{さい}えり、神^{さい}の^{わい}貧^{てん}し^{こく}き^か者^れは^ら福^{もの}なり、天^な國^{もの}は^な彼^{もの}等^なの^{もの}有^ななれば^なり。泣^なく^{もの}者^なは
さい^{わい}福^かなり、彼^れ等^ら慰^なぐ^さめ^えを得^えんと^{おん}す^{じゅう}れば^{もの}なり。温^{さい}柔^{わい}なる^か者^れは^ち福^つなり、彼^ら等^ら地^ちを^つ嗣^つがんと^つすれ^つば^つなり。義^ぎに^う飢^かえ^わ渴^{もの}く^{さい}者^{わい}は^か福^れなり、彼^ら等^ら飽^かく^れを得^えんと^あす^われば^れなり。矜^あ恤^わある^れ者^れは^{もの}福^{さい}なり、
かれ^らあ^われ^みえ^えを得^えんと^こす^これば^ろなり。心^この^き清^よき^{もの}者^{さい}は^{わい}福^かなり、彼^ら等^ら神^かを見^かんと^かす^みれば^みなり。和^わ平^{へい}
お^こな^なもの^{さい}福^{わい}なり、彼^ら等^ら神^かの^こ子^なと^な名^なづ^なけ^なられ^なんと^ぎす^たれば^めなり。義^ぎの^た爲^めに^{きん}窘^{ちく}逐^くせ^くらる^る者^{もの}
は^{さい}福^{わい}なり、天^{てん}國^{こく}は^か彼^ら等^らの^{もの}有^ひなれば^となり。人^{ひと}我^{われ}の^た爲^めに^{なん}爾^ん等^らを^の詭^しり、窘^{きん}逐^{ちく}し、爾^{なん}等^らの^{なん}
こ^と事^いを^つ諱^わりて^も諸^ろの^あ惡^{こと}し^ばき^い言^{とき}を^{なん}言^ん時^{さい}は、爾^{なん}等^ら福^よなり、喜^{よろ}び^こ樂^ため^のよ、天^{てん}には
なん^ちら^ら 賞^むく^いお^お多^おければ^おなり。

(比較用 口語訳) こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびただしい群衆がきてイエスに従った。イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。わたしのために人々があなたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸 す。

※聖體礼儀③ へ